

弁証法的唯物論への道

加藤 正

理論的に思惟することのできない人間を一般に俗人と名付けるなら、弁証法的唯物論が自己の運命を俗人の手に委ねて来たことが従来の左翼哲学界を支配し来った渾沌と無力、酩酊と謔言の現実的理由であつた。いうまでもなくこの責任は吾々自身の上に、即ち吾々自身が『批判の武器』としての弁証法的唯物論の本来の意義を種々なる関係において闡明し、これを科学的研究の諸分野において展開することを怠つたところに、ある。吾々自身が吾々の思惟する頭脳をマルクス主義の精神においていかに導くべきかを充分に意識していなかつたが故に、吾々は理論的領域におけるヘゲモニーを易々とブルジョアの俗物哲学の亜流末輩に委ね、且つこれを組織的に支持しさえしたのである。

吾々の間からは、さきに『福本イズム』即ち『全無産階級的政治闘争主義意識』なるものに基く哲学が、そして最近には『三木哲学』即ち『無産階級の基礎経験』なるものに基く『現代の意識』の哲学が、掃き出された。ところがこのいずれの場合も、吾々の理論的成熟がそれら俗物哲学を押し出したのでもなければ、またそれらの顛落が吾々自身の成熟によつてとどめを刺されたのでもない。それらは謂わば外哲学的力によつて強制処分に附せられたのである。そして吾々自身は依然吾々自身の理論的武器、弁証法的唯物論を確立することも展開することもできずに立っているのである。そうだ。吾々自身が理論的精神について何事も理解し得ない俗物なのだ。だからこそ俗物的亜流哲学が自己の格好の地盤として好んで吾々の中に根を下ろそうとするのである。吾々自身が彼等にとつて最

も気持のよい温室なのだ。

いま『三木哲学』は種々尻尾を出した後で吾々の間から単純に抹殺された。だが、さきに『福本イズム』が、次いで『三木哲学』が、吾々を地盤として名声を勝ち得た秘密、即ち理論的諸問題に携たずわる吾々自身の俗物性は、なお依然として、自覚され、克服されてはいない。それは種々様々に姿を更かえて吾がプロレタリアートの階級闘争にあらゆる破壊的思想の影響を潜入せしめる絶好の入口を準備している。

吾々は吾々自身の俗物性と決別しよう、吾々は弁証法的唯物論の理論的精神をもって武装しよう。この武装なくしては、吾々は階級闘争のいかなる経験をも、科学的研究のいかなる成果をも、これを本来の視角から闡明せんめいし、あらゆる関係においてその意義を確定し、闘争と研究との過程の中へ少しも失われることなく摂取し行くことはできないであろう、吾々はいかなる革命的理論をも貢献し得ず、敵対階級のいかなる思想的影響に対しても無力であろう。吾々は右の諸々の思想が階級闘争とその革命的理論を自己の視角からいかに『評価』し、その思想的影響をもって階級闘争をいかに攪乱かくらんしたかを知っている。『福本イズム』の意識は吾がプロレタリアートの先頭においては既に決定的に打くだかれ、政治的経済的闘争には既に正しい視角がうち立てられ、その成果が指導者小泉の著書としてさえ与えられてから長いことになるのに、理論的後方陣においては、その成果を一般化し、闘争と研究のあらゆる方面にそれを確保するために努力したどころか、再び新たな俗流哲学のために精出して温床を作ってやっていたのである。

吾々は弁証法的唯物論の理論的精神をもって武装しよう。だが弁証法的唯物論は、路上に転がっているのでもなければ、天から降って来るのでもない。それは、自分に与えられた伝統的な生活や思想の限界を嘗かつて踏み越えることを知らない保守狭小な俗人意識と闘争しつつ、哲学の二千五百年の発展を通じて練磨せられた理論的精神の成果である。この練磨がいかなる過程を経て行われたかを分析することによって、吾々は吾々の理論的意識を弁証法的

唯物論にまで高めるためにどんな練磨を与えるべきかを知るであろう。

さて一方俗人的意識と他方理論的精神との間にはいかなる相違があるか。

俗人の思考方法の一般の特徴については、あらゆる国語の寓話、俚諺が好題目の一つとしてこれを語っている。彼は自分の小さな日常生活の範囲において造り上げた考え方の枠を嘗て打破ろうとしない、そしてすべてのものをこの枠に入れて考えようとする。とにかく何等かの形でこの枠の中へ押し込んで了つたら、それで満足する。そして、いまここに自分等の前に置かれたものが果して自分等の造り上げている考え方の枠の中で解決し切れるものであるか否かを考えない。だから、一定の対象があるとき、これの理解のためにはそもそも自己自身のものの考え方、即ち自己の視角そのものから変えてかからねばならないのではないかという点には尚更思い及ばない。一例を挙げよう。——しかしながら世人が普通目して俗人社会と呼んでいる人々の中から例をひろって居れば限りがない。私は学者思索家として公認されている人々から俗人根性を取り上げて見よう。例えばニュートン。彼が物理学における画時代的な学者であつたことはいうまでもない。だがまた一方伝来の宗教的迷妄を無批判に受容れた俗人でもあつた。結果はどうであるか。彼はそのものとして解析的に明かにせられた天体の運動を、全連関において、殊にその形成において理解しようとしたとき、全く無雑作に俗人流の解決を与えてしまったのである。即ち、神の手が遊星を一定の方向に投げたのだ、するとそれは太陽との引力の影響のもとに太陽を焦点とする楕円軌道を描きはじめたのだ、そして神の手はその後も時々この運動を調整するためによつてくる。俗人の理解の中におしこめられると太陽系もこんな姿で現われて来るのである。だが神の手といえは、一体神の手のはたらきが嘗て一度でも科学的批判の前に自己を立証し得たことがあるか。宇宙の秩序に神の御手の業を見るといふが、そういう神は自然そのものに外ならないのだと既にもうスピノザ——この真実の思想家——が言つては居なかつたか。カントは太陽系をニュートンの坊主的俗物的頭の中から取り出して、それをそれが本来あるべき場所、即ち自然の全連関の中へ移し

込んで思考を重ねた。そうしたときそれは神の配慮によつて『天氣のよい朝』でき上つたのでなく、実に自然そのものの関係の結果として發展して来たことが明かとなった。カントの星雲の説、これである。カント自身がこういう立派な理論的思惟の成果にどんな俗物的な信心な感想を附加えたかということはここではどうでもよい。右と全く同様なことはリンネの如き植物『学者』についても言い得る。彼の生物の種の説——曰く、生物の種は神が一つこれを創つたもので一定不変である——は生物界の内的相互連関を把えそこなつたことの告白である。信心ぶつた俗物の狭い考え方の様式の中へは眞の連関は反映しない。十八世紀のフランス啓蒙家——この理論的結論の前に恐れざる勇敢な思想家たち——はデカルト、スピノザの合理論的精神を継承しつつ、自然の諸関係そのものから結果してくる有機界の内的展開を理解し始めた。

かくて俗人の思惟と理論的思惟との相違は次の点にある。俗人は一切のものを相手かまわず自己の日常茶飯用の考え方に引き寄せて解釈する。彼の頭の中では一切のものがそれ自らの連結を破壊され、個々別々の要素に切り離され、更めて彼独特の不細工なやり方でつづくり合わされている。この場合個々の俗人が偶々博学な専門学者だつたところで何等事態は変わらない。レーニンもこういう専門科学者を警戒している——彼等はその極めて限られた専門外では全く信用がならない、と。ニュートンやリンネにおいて、天体運動や生物の種に関する研究の結果が神話の上に礎えなおされ、俗物的先入観の中に溺れしめられたとき、それらの眞の連関、即ちそれらが一定の自然的前提によつて成立し、自然の相互連関の中で運動するという事実が彼等の頭からはみ出していたように、事象の眞の関係はその事象が俗人の頭の中に組み込まれた瞬間、彼の頭からはみ出してしまふ。

理論的な思索家の頭の中では事情はどうであるか。彼は自己の視野に入つて来る種々な事物や出来事の諸規定を充分に分析する。しかし、それらの諸規定を自分流に組み立てることなく、それらが本来結びついていた通りに結びつけて考える。そののみでない、一事象を一先ず自然から切り離し、実証的に一々の性質を分析し、必要な場合

は数学的解析の手續を加え、大体においてその事象の概念が得られたならば、その事象を再びもとの自然に置き戻し、自然の全連関の中において先の概念を再規定し、当該事象の理解を深める。ニュートンに対してカントの、リンネに対してフランス唯物論者の自然研究がそうであった。即ち自己の頭の中の諸概念の一定の連結形式の中へ夫々それぞれの事象をはめこむことによつて理解が成立するとは考えない。反対に、思惟をして事象そのものの連結を辿らしめ、謂わばこの連結をくぐらしめることによつて、事象そのものの規定を受けつつくぐり抜けて来たとき、ここに吾々の思惟ははじめてその事象を理解したことになると考える。何故なら思惟はそのときその事象の諸規定をその内部連結に従つて、吾がものとしているからである。——ところでものこの理解の仕方には一つの前提が暗黙のうちに置かれている、即ち世界はそれ自身において必然的な連関を持つていること、これである。この前提の承認およびこの連関を辿つて世界を明かにして行く学説（周知の如くそれは唯物論——言葉の眞の意味の——である！）は分らずやの商売哲学者からひどい独断論だと非難されてきた。だがギリシヤに哲学が始つて以来、この前提のもとに活動した思索のみが時代から時代へと自己の伝統を断たれることなく続いているのは愉快なことだ。それに哲学的研究が進むに従つてこの前提のもとにおける思索のみが自己矛盾に陥ることなく発展し、何等かの形でこの前提をおしのけた思索が後で見えるように結局また再びこの前提の承認に引寄せられねばならなかったことは極めて教訓的である。世界は自己自身で存立し、自己自身の中から必然的な制約を踏んで自己を展開してゆく存在の内的発展である、と。理論的思惟は即ちこの内的発展を辿るところの思考方法なのである。従つてこの規定を受けたものとして自己の裡うちに必然的な展開性をもつていること、しかもこの展開性は右の世界の内的発展を辿り得た限りでのみ、その限界内で与えられる展開性であること、これが理論的思惟の特徴である。理論的思惟は従つてその本質において唯物論的＝弁証法的思惟である。理論的思惟のこの展開性は久しい間自然の限界内に閉じこめられているが、マルクス主義において自己の制限を破り、自然過程を経て歴史の認識へと発展する。

カントがその自然研究に立派な理論的精神を發揮したことは既に陳べた。ところがカントにも『独断論』の夢から醒める機会が来た。それに機会を与えたものはヒュームである。話は遡る。西曆一六二〇年、ベーコンが『ノーム・オルガヌム』という一書を著して、当時堆積せられつつあった自然並びに自然力利用の知識が、いかなる手続で得られるのであるかを考察した。それは経験によつて、経験に合理的方法を応用することによつて、である。だがベーコンの時代にあつて実利的知識は個々の事物、個々の作用に関する知識ではあつたが、それら個々の事象をその根底において統一し、かかるものとして成立せしめている全体的連関に関する知識ではなかつた。従つて合理的方法もかかる連関に即して行使さるべき思惟形式を意味するのではなく、観察、比較、実験、等々、要するに目的とする個々の事象の眞の規定を、他の雑多な影響から切り離し、純粹な形で分析するための方法であつた。現在でも実証主義者は方法ということ（めいしゆい）を専らこの意味にとり、個々に分析された諸規定を内的に連結するという意味での方法に白眼を向けている。だからこそ神と太陽系とを結びつけて平気でいる大物理学者などが出るのである。社会的諸科学においても事情に変化はない。それはともかく、ベーコンにおけるこの方面を固定化しつつ、ロックは事物の相互連結に関する知識を目して、それが実は個々の感覺的表象の悟性による相互結合に外ならないことを結論した。次いでバークレーが、諸事象自体の内的相互関係などいうものは悟性のかかる結合を通じて考え出されたものであるということから、存在すると言ひ得るものはただ表象とそれを所有する精神とのみだと追論する。だが、精神——種々の表象を支え、これを相互に統合してゆく精神も亦、諸表象の結合を通じてのみ知る得るのではないのか。従つて唯一の合理的な結論はこうである、曰く吾人の知識は感覺的表象の相関関係以上には出でない、これより出ずるものは知識に非ずして習慣による想像の産物である、と。これが外ならぬヒュームの思想であつた。ここにベーコンからヒュームまでのイギリス経験論の發達は次のことをやつてのけたのである——事象それ自身の内的必然的な連関の抹殺、従つて自然即ち現実世界を想像の産物として押しつけつつ、現実世界の研究を

表象の研究に転化したこと、何故ならこれのみが認識し得る唯一のものだから。この結果がカントを吃驚せしめたのである——ああそうか、自然そのものは認識できないのであったのか。そしてこの見地からカントは従来世界そのものの内的連関の認識に進出して来た『独断的な』思惟を批判しはじめたのである。だがヒュームにそのまま組するわけにもゆかなかつた。何故なら、習慣的な経験からでなしに、その本質上必然的な展開であり、しかも経験に対して普遍妥当な知識が歴として存在するのである、例えば理論物理学。ところで自然自体があくまで吾々の知識の外部に立止まっているという場合、知識に習慣的蓋然的でなく必然的な性質を附与するものがあるとすれば、それは果して何であるか。それは個々の感覺的印象をかかるとして結合する悟性的思惟のはたき以外に求め得るか。かくてカントは知識を二つの要素に分解する。吾々の外部から与えられる感覺的諸事項とこれを統合する必然的思惟と。そして思惟が感覺的所与と独立に、専ら自己自身の展開性のみに基づいて何らかの知識を展開し得ると主張するや否や、自己矛盾に陥ってしまうことを彼は例えば二律背反の例で示した。これが本当の意味でのドグマ的思弁に対する経験論の批判の唯一の積極的な成果であった。だがその他において経験論は極めて破壊的な諸作用をカントの上に及ぼした。即ちカントはロック流に事物それ自体が吾々に与える感覺的素材の理論的統合によつて知識が生ずると言つたあとで、吾々の理論的思惟は、感覺素材を媒介として事物それ自体の内的必然的連関を辿っているのだという点を否定する。理論的思惟が辿つた自然は思惟が自分から『置いた』ものである。だから次いでフィヒテが出て、吾人の本質は精神的活動そのものであり、外物としてあらわれる一切のものはこの活動の展開の一定段階においてこの活動そのものが措定するのである、と結論するのは全く容易であった。

経験論が遂行した仕事、そしてカントが受け容れたその成果、これがまた講壇哲学を先頭とするわが国の一切の俗流哲学を自己の影響下においたのである。しかもこういう哲学の教養によつて『哲学者』となつた人々によつて従来唯物論的弁証法が『もり立てられて来た』のであった。彼等は自分で思考する場合は常にその理論的方法、思考

の形式において、右の影響をいかに脱し得ていないかを示した。そして専らそれを示すがためにのみ自己の思想を展開しているようである。ここではそれらの場合を個々にとつて分析している余裕はない。一つの典型として三木氏の場合が従来屢々分析せられて来た。三木氏のみならず、哲学的俗人の共通的な見地は現実世界そのものが自己自身の法則をもつて運動しているということの忘却である。そしてこの憐れな思考形式のもとにマルクス主義を捕えようというのである。意識は存在によつて規定せられるマルクスのこの命題は最も禦し易いものとして彼等に歓迎せられた。極言すれば彼等がマルクス主義から受取つたものはただこの命題のみであり、これを彼等の精神において曲説しつつ、種々雑多な考案をそこから抽き出すことが彼等の哲学であつた。存在は意識を決定する。ところで吾々が極めて豊富な入道雲のように龐大な諸々の意識を前にして、それらを決定する存在はと尋ねるなら、その場合それ自体における存在、自己自身の内的展開によつて立つている存在、というものが問題外にあるなら、吾々は意識のためにどんな存在を見つけてやることができるか。この問題に対しては彼等の『教養』がこれに答える。そんなことは簡単だ、大学の最新哲学が既にそれを教えている一定類型の意識のために一定類型の『存在』を、そしてこの『存在』のためには例の評判の存在概念を、即ち一定の人間が一定の類型的な交渉の仕方をもつて外界を取り結ぶ関係の『構造』を。この存在の類型的特質はこの交渉の仕方の性質に応じて定まる。それは人間の交渉の仕方に応じて規定される存在であるが故に、存在それ自体、人間と独立にそれ自体で存立し逆に自己自身の内部から人間歴史を展開する自然、等々の独断的な概念からは自由である。——かかる問題の扱いは彼等の特色である。先に経験論が客体的現実世界を意識の織物に、主体の表象に転化せしめたことを言った。だからその亜流が何を見るにも意識の中から、主体の方から、のぞかなければ気がすまないのは当然である。『存在とは意識を決定する限りでの存在である』（戸坂潤、自然弁証法『理想』七・八月号）

経験論が事物の内的連関を洗い流して、表象の結合をこれに代置したように、右の存在概念は人間歴史の内的連

関を清算して、主体の交渉圏を代りに礎える。然るに自然の内的連関こそ自然の人間歴史への展開を貫く糸をなし、従ってまた後者の内部連関を形成しているのだから、現代の一切の『精神科学』『歴史哲学』者流を経験論の亜流——ただ歴史的諸科学に割り込んだ経験論の亜流と正当にいうことができる。宜^むべなるかな、ヒュームが表象の相関々係以上のものはすべて習慣から来る想像の産物だと考えたように、マルクス主義志願の現代の亜流は、『習慣』により一層の考察を加え、これを種々なる類型をもった交渉形態として規定し、それに決定されるものとしての『想像の産物』を学問的研究の対象に転化してこれをイデオロギー即ち種々なる類型をもった意識の諸形態として立する。元来この交渉形態とか『存在』とかは意識を決定するだけのものではないから、結局意識形態の問題が彼等の研究を独占したのである。そして唯物論でも弁証法でも自然科学でも社会科学でも、一切は『存在は意識を規定する』という命題に従って、『存在』にのつとつて構成された意識形態として説明される。ところで彼等はいまや『マルクス主義者』なのである。彼等は階級意識を意識する。プロレタリア的・階級的として特徴づけられる一切の意識は何によってプロレタリア的・階級的であるのか、プロレタリア的なる『存在』によってである。この『存在』は、勿論^{もちろん}、歴史の内的連鎖の一環をなし、資本主義社会の止揚^{しやう}のモメントとして、資本主義社会そのものの内的法的法則から発生し、自己自身の法則によって展開するところのプロレタリア階級そのものとは趣を異にしたものである。それは上に陳^{ちん}べたところから明かなように、プロレタリアに類型的な生活習慣Ⅱ交渉形態、しかも意識の諸形態を決定する限りでの生活の型である。彼等の『哲学』の見地からは、こういう『型』こそが関心事なのである。これによって彼等はプロレタリアートとマルクス主義のために精神的闘争を行おうというのである、つまり他の意識に対抗しつつあらゆるプロレタリア的意識をこの型に即して創^{つく}ろうというのである。だが待て、階級意識の形成は階級の必然的な発展（即ち階級闘争過程）のその時々^{とき}の段階から展開するところの客観的な過程ではないのか。マルクスもだから意識の本当の説明の仕方について次の様に語っている——宗教的意識を分析して地上的な心

をほじくり出すことは、それらの諸形態を現実的な社会生活（それぞれ）の夫々の段階から導き出して見せるという唯物論的やり方に比べるなら、実にたわいもない（資本論第一巻第四篇の註八九）。しかし、意識の中から実践の形態や生活の型をほじくり出し、その上に今度は諸種の意識を『慥（たし）らえ』よう（三木氏はプロレタリア進化論をさえ考えている——氏の論文『社会と自然』参照）とする代りに、歴史の内的必然的發展の諸段階から意識の諸形態への展開を（たど）進めるためには、彼等経験主義の亜流には一切の前提が欠けている。先ずここには事物の内的必然的發展がない、あるのはただヒュームにおいて表象と表象との相関係係だった如く、ここでは『意識』と『存在』との相関性——何等の展開もなく、型の類似による対応性である。次にこの必然的發展を（たど）進めるべき方法的思惟即ち理論的思惟（これをさきに述べたところから弁証法的思惟と言い換えてもよい）がない、あるのはただ経験論の常套たる型による分類、比較、対質等々。ヒュームにおいて表象の相関性の言表たる数学のみが真の理論的知識であり、それより出ずるはみなこれ習慣の産物だった如く、彼等においても、意識Ⅱ「存在」の相関性の言表たる解釈学とか何だとかが唯一の哲学であつて、事物の内的連関を（たど）進めるための理論的思惟もそれが一つの『意識』である限り、彼等にとつては、『存在』の型に似せて作られる産物以外のものとしては考えられない。だがそういう型をもつた思惟が、事実この内的連関を（とら）把え得ないことは明かである。この型と事物の内的連関形態との間には何等の必然的な合致点も見出し得ないとき、かの型によつて、この連関形態が歪みなく（とら）把え得られるとどうしていえるのか。唯物論的弁証法、吾々の最善の道具、最鋭の武器、その鍛練こそ、唯物論的思惟の前提たる事象のそれ自体における展開とも、この展開を（たど）進めるべき理論的、弁証法的、思惟とも無縁なる経験的俗物の手に従来委（ゆた）ねられて、顧（かえり）られなかつたのである。

経験論は現実的には次の道行（みちゆき）で克服され、その歴史的な存在理由を既に失つていたのである。コペルニクスからニュートンまで、更にそこからカントが宇宙進化論を結論した力学の發展は、一步一步必然的な論証によつて経験事象を総合しながら行われた。カントはこの故に知識の中に必然的展開を（かいかく）恢復する。フィヒテはカントに内面的な

統一を与えつつ、うちに必然性を含む理論的思惟は、その本質上実践的行動へと展開する精神的主体の前段過程としてあらわれることを指適する。即ちこの精神的主体は自己の必然的制約性を克服して自己本来の実践へと転化するための必要な踏み台として、自己自身から客体的自然を立する、そして自然との相互対立のうちの展開する精神が理論的思惟として現われる。だが主体の活動自体は理論的処理の彼方かなたにある、と。ところで自然研究の進歩が、電磁気や生物等の、単なる機械的物質性以上のより微妙な事実や法則を堆積するにつれて、従来力学的自然の中に限定されていた思惟の必然的展開性は物理的、有機的自然の全体へと自己の領域を拡大する。自然はもはや精神的主体の方便以上の意義を現わし、自然の連関の中に精神の目覚めさえが看取される。自然は精神開発の予備的段階である。ここにシェリングにおいて、自然は精神的主体よりも更にもっと根底的な絶対者の上に置き直され、この絶対者は自然と精神との統一として示される。精神は自然から開発されるや、まず自然の発展を辿り、その諸規定を吾物としてゆく。その過程における精神が理論的思惟である。それは次いで実践的精神に開き、芸術において展開の頂上即ち絶対者の姿を示す、と。だが詳細に分析され、よく整頓されたる社会史的、精神史的材料は必然的思惟の展開性をして自然内への制限を破つて自己の領野を世界全体に拡げることが可能ならしめる。ヘーゲルにおいて世界全体が必然的思惟の展開のうちに包括せられたとき、その世界の統一者たる絶対者にかかる思惟過程以外の何物として現われ得るか。

私は先に理論的思惟の二つの条件を挙げた。経験論が客体的事物それ自身における必然的連関を抹殺した後、ドイツ観念論はもう一つの方面即ち思惟自体における必然的展開性を独立に取出したのであった。だが右に見た如くこの思惟は実証事実の分析、堆積と独立に発展したのでもなければ、し得るものでもなかった。このことは自分でもよく意識していた。それは専ら与えられたる諸事象を——経験科学者が屢々やるように、日常習慣的な俗物的意識によってでなく必然的な相互連結において総括し、必然的連結の環が経験的に与えられていない場合には相互

の間へ種々な媒介を設定しつつ発展したのである。諸事象の必然的連関・展開は諸事象自体においてあるのではなく、それらが必然的思惟の中へ包括せられるとき、その思惟の中において与えられるのだというドイツ観念哲学の結論はこの事情の言表に外ならない。だが経験的研究が實際的に無視してやって来たところの、そして経験論がその事情を原理化して理論的に抹殺したところの、事象の必然的な連関の展開が他の何等の方法によっても恢復されない場合、それを取り上げたことはこの哲学の積極的な功績であった。更にこの哲学的思惟について言えば、カントの指摘の如く、経験的に与えられる質料を離れては何事をも結論し得ないことあるいはヘーゲルが示した如く、それを離れては切角の展開性をもった思惟も現実的に展開しないということは大なる点である。だからいまドイツ観念哲学の亜流俗物が、与えられた諸事象の規定を連結しつつ思惟を展開するのではなく、諸事象を占有し諸規定を分析する労を省くために、教師の展開した一般的思惟方式を、相手の規定がどうであろうと頓著なくおしつけてそれで解決をつけようとする方へ導いたとしても、それは右の哲学的思惟の責任ではなかった。寧ろ、従来経験事実の連鎖の所々の欠環を自分の中で補いながら辿ったとすれば、人間活動の拡大と実証科学の発展がこれらの欠環を経験的に恢復し、また従前の不正確な分析を深め、新事実をもたらずに応じて、もう一度正確なところを辿り直すことこそがこの思惟の本質的な特性である。実際において、ヘーゲル以後の歴史的社会的変革から結果した諸出来事は、この思惟がヘーゲルにおいて持っているままの展開形式には包括され得ないことを示したのである。宗教闘争の中からはフオイエルバッハの感性的人間が自己を宣言した。人間は、ヘーゲルの思惟に包括されることによってではなく、それ自身自然の所産として自然によって、立っているのである、と。政治的動揺の中からは諸階級の闘争が、そしてそれを通じて産業の発達が自己の姿を現わした。歴史の諸連関はヘーゲルの思惟によってでなく、この発達によって即ち産業のそれ自身の必然的展開のうちに、与えられていることが示された。即ちここにおいてフオイエルバッハの人間は自己自身の自然的欲求をもって生産行為に入り、それによって歴史を自己自身の中から展開し始

めたのである。マルクスおよびエンゲルスはフォイエルバッハを出でて唯物史観に到達した。それは歴史の諸事象を必然的思惟の展開性のうちに連結せしめる代りに、歴史のそれ自身の展開をたどろうとするものであった。

事象のそれ自身、その連関、それ自身、その必然的展開が、いまや少くとも歴史の領域で恢復され始めたのである。それは従来といえども極めて限られた範囲でなら確立されていなかった。果実と芽と花とは、吾々がその間に必然的な連結を考えてやらなくとも、一本の植物が外界の栄養を摂取しつつ成長する過程のうちに既に自己自身の連関と自己自身の発展とを持っていた。そして十九世紀の経験的諸科学の進歩はこういうそれ自身の発展的連関を次々に明るみに出し始めたのである。従来事物のそれ自身の展開といえは多少系統的にはただ力学的自然において明かにせられて居たにすぎなかった。だから事物の自然必然性を辿る唯物論がこの範囲を出ることができなかったのは当然である。そこで唯物論はギリシヤの昔から十八世紀のフランス、更にフォイエルバッハまで、事物の展開および連関の形態については力学的自然に行われている形態以上のものを理解し得なかった。これが機械論的唯物論である。フォイエルバッハが当時においては事物の連関の言表に外ならなかったヘーゲルの思惟をおしのけたとき、彼の立し得た人間は自然的諸要素、肉体、感覚、衝動、欲望、感情の寄せ木細工にしかすぎなかった。そして人間の創造した文化をかかえる人間に帰着せしめ、還元せしめ、謂わば人間から展開したものをかかえる人間へ封じ込めることによって、人事諸般を説明したつもりであった（フォイエルバッハのテーゼ四および前出の資本論におけるマルクスの言葉参照）。

シエリングが思惟の力で機械論を脱したとすれば、エネルギー変化の発見は機械的唯物論をして力学的関係そのものを辿って物理的・化学的自然へ出ることを可能ならしめ、生物進化の発見は無機的・自然的の盲目的必然性そのものを辿って有機的・自然的の合目的運動を把握することを可能とした。この合目的性は人間において目的意識的行動即ち先ず生産行為として発芽する（この主体的行動を機械的唯物論は——フォイエルバッハも——理解しなかつた）。だ

がこれらの領域において多くの発見がおびただしく堆積しているにも拘らず、唯物論を前進せしめるための試みは極めて不十分にしかなされていらない。それどころか機械的唯物論は、これらの発見が正に自己の正当さを立証したかのように感違ひしたのである。何故なら一切は力学的自然から生れるとすれば、吾々は一切のものを結局何らかの元子げんしとその運動として説明できるから、と。だが一切は力学的自然の中から展開してくるのであって、この展開過程を外にしては何事も理解できないのである。一箇の有機体も元子の結合によつて出来るのでなく、元子の運動の一定の条件のもとで生じた物理的・化学的過程の中に醸製された原形質から出発し、外界との交互作用のもとに自己を分化しつつ、発展して来たものであり、従つてこの連関発展を度外視して、力学的自然の機械的連関形態へ還元しようとするれば、その有機体はきつとこう言つて歎息するだろう——長い間の自然的試練を積んでようやく一人前になつたわしに、また元の要素へ還れというのか、人間はありのままのわしを理解してくれることができないのか。これに対して吾々が機械論を脱するにはやっぱりヘーゲルの思惟を置いて外に方法的指針はなかつた。しかし吾々がそれを手引として事実そのものの必然的連関展開をありのままに辿り得たところではこのヘーゲルの思惟もその歴史的な存立権を失つた。理論的思惟は、自己が辿るべき事物それ自身の固有な内的必然的發展を与えられて、自己を唯物論的弁証法として立した。この思惟は自己の中に、自己が辿り得た限りでの世界の内的展開に相応じて、自己自身の展開性を蓄積する。世界の無機械的過程から有機的的自然へ、その分化発展から人類の形成へ、生産における分業から階級分裂と国家の形成へ、最後の階級対立社会たる資本家社会へ、その社会の内在的條件によるプロレタリアートの形成・独裁への発展、それから結果する階級止揚しやうと国家の死滅、こういう世界の連関を吾々はいまそれ自身の展開において辿ることができるのである。この展開を辿り、それらの規定を自己のうちに収め、自己をこの発展に合致せしめて形成するとき、吾々の思惟はますます現実世界の運動に緊密に適合した展開性を自己のうちに確保して行くのである。吾々は現在おびただしい実践的、科学的成果を眼前にひかえているが、それらの成

果を吾々の思惟の中に確保し、蓄積し、新しい現実の認識のための方法的指針を鍛えることに対して、吾々は殆んど、否全く何事もなしていない。理論的思惟は遠く遠く遙かな後方へとり遺されてしまっている。ある哲学者は遂に理論を見失なうて、唯物論の真理性は『実践への迫力』によって判断されねばならないとして『生活性ある物質を直ちに承認する一種の物活論』的唯物論をマルクス主義のために追従している（本多謙三、唯物論と実践、『理想』唯物論研究号）。こういう風に理論を煽動文学と同一に取扱う傾向は、理論的思惟の影薄き吾々の間にあつては種々な形で極めて根強く且つ広般に行き亘っている。理論は現実のありのままの展開を言いあらわし得たとき、そのときにのみ、実践への真の力となるのである。

理論的思惟の恢復は緊要なる問題である。吾々は諸事象のそれ自身の必然的な連関と展開を世界の全体に亘つて確立しつつ、自己の意識をそれに則して打鍛え、その展開形式を自己の中に摂取してゆくに依りて、あらゆる無力な有害な論言的意識を振り落すことができる。この過程における理論的思惟の形成は、吾々の当面する諸々の事象をそれ自身の必然的展開において闡明し、その成果を弁証法的唯物論のうちに確保してゆくための必須的前提である。吾々が、理論的意識の唯物論的弁証法にまで鍛え上げられる過程について要約したところは極めて簡単であつたが、それにしても次のことを知るには充分である、即ち人間の理論的意識は種々なる段階を踏んで発展するものであつて、この段階は現実世界の必然的展開に対応するものなるが故に、それ自身必然的であり、それを飛び越えて発展することも、また別の道から発展することもできないこと。だからこの必然的段階を踏んでいない思惟は自己を弁証法的唯物論として立すべき何の根拠もないこと。この段階を踏んでのみ発展し得る思惟は、従つて、この段階を踏みそこなつた瞬間から、そのときまでに形成せられた思惟形態をいつまでも持ち続け、いかなる対象に臨んでも、その対象固有の諸展開形態をあるがままに理解し得ず、専らそれらを自己の思惟形態に還元せしめ歸着せしめてしまう結果にならざるを得ない。かくて事象のあらゆる具体性、特殊性は抽象化されてしまう。この事

情はヒュームやカントの現代的使徒が弁証法的唯物論において単なる言葉以上のものを理解し得ない事実のうちにもこれをうかがうことができる。彼らが弁証法的唯物論を自らに納得せしめることに成功した瞬間、弁証法は或いは進化概念に、或いは歴史主義に、そして唯物論は或いは経験論・実証論に、或いは存在学・解釈学に変貌せしめられているのである。このことを三木氏だけは勇敢に自ら公言している。いずれにしても現在弁証法的唯物論の信奉者たる吾々の間においてこの理論がうち立てられ、発展させられているとはどうあつても言い難いのである。吾々の俗物根性が思惟の踏むべき必然的段階を忘れさせているのである。哲学においてはこの俗物性を経験論が理論づけているのを吾々は見た。だから吾々の俗物意識が哲学としゃれこむときすぐ経験主義的謔言せんげんに顛び込むのは自然の勢である。だが、ここでは、その種々相を分析するという極めて興味ある試みの強い誘惑を残念ながら振り切らなければならない。吾々はただ、この段階にある限り、いかなる闘争の経験、いかなる研究の成果も、これを充分に評価し、失われることなく摂取し、これを一般化し、新たな闘争と研究の中に生かしてゆくことを断念しなければならぬということをお返すだけに止める。

吾々は俗物的意識から理論的思惟に、そこから自己の限界を止揚しやうしつつ思惟の必然的約束に従って弁証法的唯物論に到るべき過程と諸条件について要約したのであったが、これはとりも直さず思惟発展の法則であり、吾々の思惟はこの発展過程のいずれかの段階において自己を見出すことができるのである。そして自己をそのいずれかの段階において見出し得た限りでは、また自己を弁証法的唯物論に向つて前進せしめるための媒介たるべき諸条件を意識的に把握とらえることができるだろう。思惟を正しく導くには、吾々は思惟の法則・思惟の条件を知らねばならぬ。それは世界の内的必然的な展開に対応して、自己自身の中に内的必然的な展開をもっている。一つの事象が他の事象から展開するとせば、後者を把握している思惟のみが前者の正しき把握を展開することができる。かくて吾々が現在の歴史的諸問題の上に理論的照明を与え得ていないとすれば、それは吾々が何等の強固な歴史観を展開していな

いこの結果であり、これはまた吾々が自然について少しも明確な理解をもっていないことに連関している。そしてこれらすべてのことは、理論的思惟というものの性質に対する吾々の無知に由来する。

理論的思惟は一定の過程を踏むところの展開である。この過程を無視する限り、或は首尾一貫的に辿らない限り、吾々は経験論や先験論や機械論が陥没した観念論の泥沼に自らも入り込みながら敢て気付かないだろう。だが吾々がこの過程を意識し、これを首尾一貫的に辿り始めるや否や、かのドイツ観念論の発展について見た如く、それらの雑多な無力な思惟を止揚しつつ、俗人意識の最後の仕上げたる観念論をも突き破って、プロレタリアートの歴史的使命を照明する弁証法的唯物論にまで到達するのは必然の道である。

吾々がこのことを意識して協力するなら、吾々の理論的仕事における達成は速かにして且つ確實であろう。

附記

- 一、 右の根本見解は既に『自然弁証法』の邦訳者が、その訳序においてこれを定式している。ついて対照されたし。
- 二、 八月初頭脱稿直後に、私は『プロレタリア科学』八月号における「三木哲学に関するテーゼ」を読んだ。従って、この論文では、該テーゼに関する一切の考慮は保留せられている。ただその後三木哲学の地位が変化したので発表に当って首部と末尾を若干変更した。テーゼに対する私の見解はこれを同誌上で批判に問おうと思う。

(初出、『思想』一九三〇年二月号、山野幸夫名にて掲載)

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年十二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。